
Turning Point

神山 備

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Turning Point

【Nコード】

N0176Y

【作者名】

神山 備

【あらすじ】

拙作「バニシング・ポイント」を菅沼（北村）冴子の側から書いてみました。

好きで好きで、奥さんから奪いたいとまで思っていた大学時代の先輩、衛の死。夫と出向いた告別式で、先輩のかつての妻博美をそこで見た冴子は、晩年の衛の様子を知り、思わず彼女の頬を打ってしまうのですが……

Turning Pointとは改心の意味も持ちます。「バニシング・ポイント」で、後日の博美と冴子の仲の良さがどこからきているのかというご指摘があつたので、書き始めた物です。

そのため宗教色が色濃く出ています。予めご了承ください。

現時点で、この原稿はサイトと他1箇所べつに掲載されています。

突然の訃報

それはいつも変わらない連休の朝だった。私たち家族は遅めの朝食兼昼食を摂っていた。電話が鳴った。

「ママ、でんわだよ」

電話をとった次男の健斗が私に電話を持ってやって来た。

「誰から？」

「美加ちゃん」

それはかつての会社の同僚、高田美加だった。未だに独身を貫いている彼女は、自分には子供はいないんだからおばさんだなんて呼ばせないと、私の子供たちにも『美加ちゃん』と呼ぶように強要するような奴だ。

「もしもし？ 休みの日なのに何か用？」

私がそう言つて電話に出ると、美加は電話口で大きく息を吐いてから、

「ねえ冴子、落ち着いて聞くのよ」

と言った。でも、そう言う美加自身がそうとう慌てている感じがした。

「何よ、いきなり」

「今朝、寺内さんが亡くなったの」

私は事態が全く飲み込めないで、しばらく口をぱくぱくと開けたり閉じたりした後、ようやく

「寺内さんつて、あの寺内衛さん？」

と聞いた。

「そうよ、営業の寺内さん。事務所で倒れてて亡くなっているのが発見されたらしいわ」

「ウソ！」

「ウソじゃないわ。とにかくお通夜とか告別式とかまた連絡入れるから。篤志さんにもそう伝えて。じゃあ、そういう事だから。他にも回さないといけないから切るね」

美加はそう言って電話を切った。

「高田がなんだって？」

電話を切って蒼い顔をしている私に夫篤志がそう聞いた。

「先輩が死んだって」

寺内さんは会社以前に大学時代のサークルの先輩でもあった。社内結婚した夫の篤志に、名前を冠せず先輩と言う時にはたいてい彼のことだった。

「先輩が死んだ？ 嘘だろ？ 金曜日に、『休み明けに一気に形にしたいのがあるから』って張り切っていたんだぜ」

「今朝、事務所で死んでいたって。後のことは、追って連絡するからって」

「マジかよ、それ」

私は美加の言ったことを事務的に篤志に伝えた。あまりに突然のことに篤志も驚きを隠せない。

葬儀のことは、夕方になってやっと美加から連絡があった。

「えーっと、お通夜が明日の夜7時半からで、告別式が次の日の朝11時ね。場所は……〇〇教会？ 冴子、〇〇教会って知ってつか？」

私は黙って頷いた。そこは17年前、先輩が結婚式を挙げた場所だった。

「ああ、冴子が場所知ってるって。俺が定時にできれば間に合うから、途中で冴子拾ってお通夜の方に出させてもらうわ。えっ、分かった。ほい、高田が電話代わってくれて」

そして、連絡事項を言い終えた美加は篤志に私に代われと言ったらしい。篤志は私の手の上にそう言ってポンと子機を乗せた。

「冴子、大丈夫？」

「何が」

「ムリしなくて良いからね。なんなら、地図ファックスしようか？

教会の方から会社に送ってもらってるから。それで篤志さん一人で行ってもらえばいいじゃん」

長い間先輩を思い続けたことをよく知るこの友人は、別れた奥さんの方が信者である教会で告別式をすることを気にかけてくれているのだ。

「良い、大丈夫」

そうだ、だからと言って私は先輩の今の妻でも愛人でもない。菅沼篤志という男の妻だ。先輩がかつての奥さんとよりを戻そうが何をいう権利もない。

「ただど……どうしてあの人なのだろう。どうして、私ではいけないのだろう。」

何度も自問自答したその問題をまた心の中で蒸し返して唇を噛みしめた私に篤志は、

「辛いだろうけど、ちゃんとお別れはしてこないと。あとで後悔するから」

と、私の頭に手を乗せてそう言った。

変わり果てた先輩に……

翌日、仕事を終えて篤志が私を迎えに来た。

「ほら健斗、ゲームばかりしてないで、ちゃんと宿題しときなさいよ」

その言葉に、健斗が面倒臭そうに

「はいはい」

と返事をする。上の息子拓也はまだクラブから帰ってきていない。突然出かけることになっても手は掛からなくなったなと思いつながら、車に乗り込む。すると篤志は、

「なあ冴子、驚くなよ」

と言った。でも、

「何が？」

と聞き返しても、

「ちよつとな。でも、行けばわかるから」

と歯切れが悪い。美加と言い、気を遣いすぎだと思う。今更死んだ相手に対して焼けぼくいに火をつけてどうしようと言っのだろう。篤志、私はもうとつくに君しか見てないのに……

だけど、お通夜（前夜式というらしいが）の会場に入って、私は美加や篤志の歯切れの悪い言葉の本当の意味を知った。

まず、教会の入り口近くの長椅子に、先輩のかつての配偶者、博美さんが座っていた。やつぱり元の鞆に納まっていたのか。でも、これは充分私には想定内の範囲だった。この教会でお通夜をすると思いた時からそうなんだろうと思っていた。

それで、私が彼女に声をかけようかと逡巡している間に、堀木さんが男性を一人伴って入ってきた。おそらく、彼も篤志や堀木さん同様、私が辞めてから入社した会社の同僚なのだろう。堀木さんは博美さんに気づいて、お悔やみの挨拶を述べた。

博美さんは堀木さんの挨拶に応えながら、もう一人の——綿貫さ

んと紹介された人——を見てから先輩の遺影を見て、再び綿貫さんに視線を戻した。その時彼女は、こっちが思わずドキリとするほど寂しそうな顔をしていた。

その理由は、改めて先輩の遺影を見て気づいた。それは確かに先輩のだけれど、先輩じゃない。先輩だとは認めたくないと言った方がいいのだろうか。祭壇に飾られていたのは、私が最後に会った彼より明らかに20kg……おそらくはもっとだろう、体重が増加しているであろう先輩の笑顔だったからだ。

確かに私がまだ勤めている頃からその兆候はあった。だけど、私がいたころはまだふつくらとした中年太りくらいだったのだ。

そして、今堀木さんと共に訪れた人も相当な巨漢だ。写真と比べるのは難しいが、体重的には先輩より多いかもしれない。彼女は綿貫さんの行く末を心配してあんな顔をしたのだろうか。あるいは先輩よりもさらに肥満した彼が生きていて、先輩が死んだことが納得できないとも思っているのか。

私は無性に腹立たしくなった。そんな顔をするのなら、あんな白々しいお芝居を真に受けてさっさと離婚などしなければ良かったのよ。自分がどんなに愛されていたかも知らないで、悲劇のヒロインになりきっていた彼女。自業自得だ、私はそう思った。

博美さんはそのまま後ろにいるつもりだったみたいだが、親戚らしい女性（後で、先輩のお姉さんだと知ったが）に促されて洪々前の席に移動した。私たちは博美さんが座っていたのとは反対の長椅子に陣取った。

牧師のメッセージで、先輩が半年ほど前から教会に通っていたこと。そのきっかけは病気であったこと。もうすぐ博美さんとよりを戻すはずだったことを聞く。みんなが涙を流す中、私にはほとんど怒りが積もっていった。

『博美を壊したくない』が先輩の離婚の理由だった。『だから、お前の気持ちには応えられない。俺は今でもあいつが好きだから。ただ、俺が引きたくても引けなかった引き金を引いてくれたことは感

謝する』あとき、先輩はそうとまで言ったのよ。

それなのにあなたは、先輩を壊した。許せない……

前夜式の終わりを告げるアナウンスを聞いた私は、衝動的に博美さんの前に出ていくと、

「人殺し！先輩はあんたに殺されたのよ！！」

と叫んで彼女を平手打ちにしていた。

この人達……ずれてる

「北村さん……」

「菅沼、止せっ！」

いきなり博美さんを殴った私を見て、慌てて堀木さんが私を羽交い締めにする。

「かつこ良かった先輩をあんなに太らせて、突然死させちゃうなんて。あんたは人殺しよ」

私が羽交い締めにされたままそう叫ぶと、前の方から親族らしい男性がつかつかとやって来た。彼は、博美さんをかばうように間に立つて、

「それは、そのままあんたに返すわ。あんたがおらんかったら、衛君と博美ちゃんとは別れんで済んだんや。そしたら、衛君は一人寂しく大食いする必要はなかった。そしたら、今みたいな結果はなかったはずや。僕は赦しを説く立場やけど、あんただけは許せそうにない」

と早口の関西弁でそうまくし立てた。

「曳津先生、それは違うわ」

それに対して博美さんは、首を横に振りながらそういった。それにしても、先生？ ああ、牧師か。信者は牧師のことをそう言うらしい。そうか、悲劇のヒロインはこうやってみんなを味方に付けるのか。

「何がちゃうのん！」

だけど、ムキになってそう返す曳津牧師に博美さんは私の想像だになかった言葉を吐いたのだ。

「確かに、私も北村さんのことは許せなかったの。特に、15年ぶりに衛に会った時は、私の15年間を返してほしいと思った。でもね、許せませんって祈っても平安は与えられなかったの。そして神様に『このことを感謝しなさい』って示されたの」

は？ 何それ！？ さらに博美さんの理解の範疇を超えている台詞が続く。

「北村さん、あなたがいなかったら私たちは離婚してなかった。それは事実だと思う。だけど、離婚は私が持っていたコンプレックスから私を解放してくれた。もし、あのまま衛と夫婦を続けていたら、私きつと壊れてたと思うから」

「博美ちゃん……」

「それにね、衛は私と離れることで神様と向き合うことができたと思うの。神様は衛がちゃんと信じた上で引き上げてくださった。昨日の洗礼式で、私にははつきり衛の永遠への道が見えたの。北村さん、私はあなたがいたから御国に望みがつなげた。それは感謝すべきことだとは思いませんか、曳津先生」

「それは……」

曳津先生は渋々納得しているようだけど、正直言っただけの彼女の言葉は私には全く理解できなかった。

「『絶えず祈りなさい、喜びなさい、すべての事に感謝しなさい』まさにみことばの実践ですね」

そして、そこに今度は若い男性が笑顔で割って入った。

「安藤先生」

この人も牧師なのか。この教会、何人牧師がいるのだろう。

「曳津先生、先生は私に寺内さんの洗礼準備会を頼むときに言うてくださったじゃないですか。」

『このことに深い神の配慮を感じる』と。人間的には悲惨だとは思えない事柄ですが、神はそれすらも恵みと変えられるのだということ。私は今、神のそんな深い摂理に感動で震えが止まらない。この安藤という牧師はそう言っただけで、私が全く理解できない事柄に関して目をきらきらさせて感動していた。安藤牧師はその笑顔を私に向けると、

「北村さんとおっしゃいましたっけ」と名前を聞いたので、

「今は結婚して菅沼です」

と、返す。別にムキになつて訂正することもないのだが、何となく旧姓で呼ばれると今でも犯人扱いされているような気がしたからだ。「菅沼さん、あなたは本当は自分が不用意にいった一言で寺内さん夫妻が離婚してしまったことを今でも後悔しているんじゃないんですか」

「あ、いえ、ええ……」

分かつていたけど、目を背けていたそのことを指摘されて、不意に涙が私の頬を伝つた。

どんなことをしてでも手に入れたと思った。でも、彼は別れた後も自分を見てはくれなかった。彼の目に映っていたのは、いつも一人だけ……何故だ、どうして彼女にそんなにこだわるのかとずっと思つてきた。

だから、私はこの人に斬られたかつたのだ。その時やつとそれが解つた。私は、

『衛を殺したのはあなただ』と取り乱して叫ぶ彼女を見たかつた。そしたら、私自身の思いに決着を着けられる……はずだったのに。それを、この人は恨まれても仕方ない自分に感謝するですって？そして、それが『みことばの実践』ですって？

「じゃあ、悔い改めましょう。悔い改める者の罪を神は許してください。あちらで一緒に祈りませんか」

私は安藤牧師の誘いにこくりと頷いた。そこに私が求める答えがあるような気がしたからだ。

あの人達…… ホントにずれてる

「僕も一緒にいいですか？ あ、冴子の夫で、菅沼篤志と言います」
「ええ、もちろん構わないですよ」

私が礼拝堂の隣の部屋（後でそれが母子室という幼児を遊ばせながらメッセージを聞くことができる部屋だと知った）に行くのを見て、篤志がやってきた。

そこで、私は生まれて初めて神に祈った。神社なども神様と言うから、初詣などを含めばそうではないのかもしれないが、平易な具體的な言葉で声に出して祈るのは初めてだ。当然、ふさわしい言葉など浮かんでくるはずもなく、安藤師の言葉をなぞって口にするだけなのだ。

そしてそれが終わって教会を後にしようとした時、博美さんが、

「菅沼さん、また来てくださいね」

と言った。私は社交辞令と言うには似つかわしくない清々しいその表情を見て、思わず

「あなたは嫌じゃないんですか？」

と彼女に聞き返していた。

「へっ？」

「私は先輩を横取りしようと思っていた女ですよ」

「だからです。同じように衛を好きでいてくれた人なら、すごく話合うと思うから」

それに対して彼女はそう言った。

あの人、なんかずれている。駐車場に着いて篤志にそう言おうとした時のことだった。教会の中から慌てて走ってきた女性がいた。

「菅沼さん、先ほどは主人が失礼なことを申しまして。私、博美の姉の曳津順子です」

女性はそう言って私に頭を下げた。主人ということは、あの曳津牧

師というのは、彼女の兄（または義兄）になる訳か。なら、彼女の側に立って物を言うのも何となく理解できる。

「もし良かったら、また来てやってくださいね」

そして、この人もまた私を誘った。何故？

「え、ええ、まあ」

私は、その時牧師の妻という肩書きがぱつと頭に浮かんで、そうまでして信者を増やしたいのかと、おざなりに返事をした。すると、

順子さんは

「お願いしますね」

と、ほっとした笑顔を向ける。そして私の怪訝そうな顔に気づいたのか、

「ヒロ、同年代の友達がほとんどいないんです」

と、付け加えた。だからって、それをわざわざ夫を奪おうとしていた女に言うの？ 私はそう思ったが、順子さんが続けて言った、

「あの子、ヒロはね、ある病気で成人はできないだろうって言われていたんです」

という言葉で思わず息を飲み込んだ。とても今はそんな風には見えない。

「ヒロが18の時に治療法が確立されて、あの子奇跡的に助かったんですけど。そんな訳でヒロには同年代の友達が本当に少ないから」

「順子さん、実生みのりから電話。羽島に今着いたって」

その時、玄関の方から曳津師が順子さんを呼ぶ声が聞こえた。

「あ、じゃあ主人が呼んでいるので行きます。じゃあ、お願いしますね」

順子さんはそう言うのと、来たときと同じくまた慌ただしく教会の中に入ってしまった。

「何なんだろうな、あれ。たぶん、ありあ奥さんと彼女が兄弟だな。顔はそんなに似てないけど、ぶっ飛び具合がそっくりだ」

車で走り出した後、篤志がぼそっとそう言った。私はそれに頷い

てから、

「ねえ、私またここに来て良い？」
と聞いた。

「何でまた？」

「何だか、あの人達面白そう」

私がそう言つと、篤志は目を丸くして、

「確かにぶっ飛んでるけどさ。あの元奥さんはともかく、他の信者に何か言われないか？ お前、いきなり仲間を殴った訳だし」
と言つたが、

「ま、俺もまたあの安藤さんとは話してみたいとは思つたし、もっかい位は来るか。そこで何か言われる様ならもう行かなきゃ良いことだし」

と言つて頷いた。

そして、ここから私たち夫婦の教会生活が始まったのだつた。

新来会者

翌週には用事があり行けなかった私たちは、その次の週、早速教会の礼拝に出席した。

「ようこそ。よくいらつしやいました」

玄関先で受付の女性がそう挨拶した後、

「この教会は初めてですか？」

と聞いてきた。結婚式と前夜式には来たけれど、教会らしい教会は今日が初めてだ。

「はい」

と私が頷くと、

「では、お手数ですがこちらの用紙に礼拝が終わるまでで良いですので、ご記入願えますか？」

と、週報と書いてある礼拝の式次第、聖書・賛美歌とともに、一枚の用紙をバインダーに挟んだ状態で私に差し出した。アンケートのようだった。

来会のきっかけ、信仰歴（何故こんな質問事項があるのか、このときは解らなかったが、この教会が始めてでも、転勤や旅行などで別の教会に通っているということの方が、実は多いのだということの後で聞いた）聖書を読んだことがあるか、メッセージがどうだったかと、事細かに記入するようになっていた。

「冴子、頼むな」

すると、篤志は事務屋のクセに、さっさと私に放り投げてきた。

「私だってわかんないわよ」

と、むくれて私が返すと、それを聞いていた受付の女性が、
「そんなに堅苦しく考えないで。これは集会の案内を差し上げるためのものですから、とりあえずご連絡先だけでけっこうです」と付け加えた。見ると、用紙の末尾にも同じことが書いてあった。

それを持って私たちは礼拝堂の一番後ろの座席に座った。

しばらくすると、がやがやと幾人もの子どもたちが礼拝堂に入ってきた。母子室で行われていた子ども礼拝が終わったのだ。出席しているのはほとんどが信者の子弟で、終了後親の所に一旦来るのだ。それから程なくして博美さんが礼拝堂に姿を現した。

「菅沼さん、来てくれたの！」

私たちを見つけると彼女はそう言っで破顔した。このままハグでもされてしまいそうな勢いだ。そして、

「ねえねえ、そんなところにいないで一緒に座りましょう」

というて、前から2番目の席を勧める。確かに長椅子は三人掛けだったけれど。相変わらずぶっ飛んでいる。

「お母さん、新しく来てくれた人を困らせちゃだめだよ」

そこに来た長身の女の子が博美さんを窘める。ああ、この子が先輩の娘さんの明日美さんか。先輩によく似ている。明日美さんは私たちの方を向くと、

「お父さんの会社の人なんですよ。初めて来て、いきなり前の方じゃどん引きしちゃいますよね」
と言っで笑った。

「だって、全然知らない人が座るよりいいでしょ」

それに対して博美さんは小さな子どものようにむすっと頬を膨らませていた。まるで親子が逆転しているような感じた。親が頼りないと子供がしつかりすると言うが、明日美さんと博美さんはそうやって母一人子一人支え合ってきたのだろう。

「お嬢さんと一緒に座らなくていいんですか？」

と私が聞くと、

「あの子はお義父さんたちと座るから、いいの」

と返してきた。だが、全く知らない人が横に来るよりは良いかと、彼女の言う席に移動した後、程なくして先輩のご両親がお姉さんと共に入っでこられた。明日美さんが喜々として真ん中少し後ろの席に導くのを見ながら、

「あ、衛のお父さんとお母さんとお姉さんの」

と博美さんが言った言葉に私たちは固まった。「おとうさん」という音に私達はてっきり博美さんのご両親のことかと思っていたが、それは先輩のご両親で、先輩が亡くなった後彼らもまた通い始めているのだという。

やっぱり来ちゃいけなかったかとも思いつつ、私は目が合った彼らに無言で頭を下げる。すると、彼らも同じように無言で頭を下げた。そして、その表情に怒りや苛立ちがないのをみてとりあえず安堵する。

案外、彼らの事が目に入ってこない前の席でよかったのかも知れないと思いながら、その日の礼拝が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0176y/>

Turning Point

2011年11月2日14時14分発行